業 界 短 信

（２２年８月１日～９月３０日）

鉄骨需要６％減、１－６月２０１万トン（産業新聞、８／３）

国土交通省の建築物着工統計から推計した１－６月の鉄骨需要量は約２０１万トンで前年同期比６.４％減少した。暦年ベースで見た鉄骨需要量は０９年に約４１０万７０００トンと前年比３３.４％減と５年連続で減少しており、国内の建設需要は一部都市周辺の大型案件を除くと極めて低調だ。１０年も前年並みの水準にとどまるとみられている。６月は、前月比３.３％増（前年同月比６.２％減）。物流倉庫などは比較的堅調。ただ、工場など民間投資が戻っておらず、先行きも不透明感が色濃いままだ。

１－６月建機出荷額、０８年比６割に回復（産業新聞、８／３）

日本建設機械工業会によると、１－６月の建設機械出荷金額は8189億円で、前年同期比５０.０％増。０８年同期（１兆３５５６億円）の６割程度まで回復した。内需は前年同月比１.５％減、外需は同８４.８％増。６月は、同８７.０％増と６カ月連続増。油圧ショベル同１８.３％増、油圧ブレーカ圧砕機同２０.７％増などが増加。

ヨシケン、埼玉・川越に新拠点（鉄鋼新聞、８／５）

㈱ヨシケン（東京都板橋区、吉柴博社長）は、川越地区に鋼材の加工販売及び溶接・組立てを手掛けるための新たな事業拠点を確保した。日鉄商事鉄鋼建材埼玉が今年５月に閉鎖した旧本社事業所跡地を購入、条鋼製品や鋼板、鋼管類などを在庫するほか、現在は戸田加工センターで手掛ける製作部門を移管する。１０月中の操業開始を目指す。

同社は板橋と戸田市内３カ所の計４拠点で各種鋼材の在庫販売やレーザ切断、孔あけ、折り曲げなどの加工及び製罐を行う。城北地区から戸田、川口といった埼玉県南地域にかけて客先が多い。

京葉ブランキング、レーザ切断機増設（産業新聞、８／１１）

京葉ブランキング工業㈱（千葉県市原市、佐藤宣之社長）は厚板第２工場に２ｋＷレーザ切断機１基を新設し、６月下旬から稼働開始した。多様な分野で高まるレーザ加工のニーズに対応する。本年度に入って橋梁向けや造船向けの受注を本格化した。こうした分野向けで加工する厚板はサイズも大きく、マーキングの作業量も増える。導入機種はマーキング機能を備えており、既存設備との組み合わせで作業効率の向上を見込む。世界最大級の連続ブランキングプレスラインを持ち、溶断から組み立て、塗装、一次加工から三次加工までの一貫生産体制を整える。建設機械向けや大型自動車部品などの需要は徐々に回復。橋梁や造船向けのほかにも、免震材やタンク材などの仕事も増えてきているという。

韓国製厚板の輸入増加（鉄鋼新聞、８／１７）

韓国からの厚板輸入量が増加傾向にあり、今後さらに拡大する可能性が高い。造船及び建産機メーカーなどでポスコ材が採用されるケースが増加していることが主要因とみられ、自動車向け薄板に加え、厚板でも造船メーカー向けなどで長期実績のあるポスコ材が購買ソース拡大を目指すユーザーに採用されやすい状況にあるようだ。韓国からの厚板輸入量は今年１～６月で、約５万６千トンで、１０万トンを超える勢いにある。ポスコの日本向け厚板輸出は、過去数年は年間２～３万トン程度にとどまっていたが、１０万トン超のペースまで拡大。今後、光陽製鉄所の新厚板工場（年産２５０万トン）の稼働により輸出余力が高まることから、更に拡大する可能性が高い。また、輸入材の少ない建材分野でも品質的には問題ないとの声が聞かれ、使用比率は高まっていくことも予想されている。

三幸金属工業所、加工強化、３割増計画（産業新聞、８／１９）

㈱三幸金属工業所（大阪府堺市、楠本雄宏社長）は今期（２０１１年７月期）、経常利益で４～５億円の確保を目指す。加工は厚物・広幅製品の受注を強化し、数量的には前期比３割増の月間１万５千トン強を目指す。とくに来年２月稼働予定の堺浜工場のスーパージャンボレベラーについては稼働後に順次加工数量を順次引き上げていく方針。また、同工場完成後はこれまで営業倉庫に預けていた母材コイルを自社に集約し、在庫経費の削減に寄与させる方針。

鈴将鋼材、帳票にミルシート番号を明記、品質管理向上（産業新聞、8／19）

鈴将鋼材㈱（名古屋市南区、鈴木康司社長）は、自社加工製品である切板のトレーサビリティを含めた品質管理体制を強化した。需要家に納入する帳票に、切板母材のミルシート番号を明記するサービスを８月１日から開始したもので、需要家の品質、安全管理徹底に貢献することで、信用力の向上につなげることなどが目的。

ミルシート番号は需要家に納入する送品案内書と受領書に、それぞれ製品名や材質、サイズ、図形、枚数、重量、使用設備などとともに記載。使用部材が多い場合はチャージ番号の一覧も添付する。どの製品をどの鋼板から切断したかを明確化することで、需要家からのトレーサビリティを含めた品質管理ニーズの高まりへの対応力を強化した。同社では、１０年ほど前から、使用母材をＳＳ４００材主体とし、加工品質の向上とともに、母材管理の徹底も図ってきた。とくに近年は需要家からのトレーサビリティも含めた品質管理ニーズが高まってきたこともあり、社内的なミルシート管理の徹底に注力。母材入荷時にミルシート番号を事務所でパソコンの管理システムに入力するとともに、材料取り合わせの際にもナンバリングを徹底し、需要家の要求に応じいつでもミルシートが提出できる体制を構築してきた。今回の取り組みはこれまでの社内的な活動を需要家に公表することで、ＳＳ材での加工を証明するためのもの。社内の管理システムを一部改良し、帳票類へのミルシート番号の記載を可能にした。

太陽シャーリング、表裏同時面取り機導入（鉄鋼新聞、８／１９）

太陽シャーリング㈱（広島市中区、浅利重法社長）は、国際海事機関（ＩＭＯ）が義務付ける船舶バラストタンク等塗装基準に準拠し、切断した鋼板のエッジ部分を表裏同時に高速面取りできる設備を導入した。建造工程の客先との一貫最適化の中で、今後増加する切板の面取り加工を取り込むための初期投資と位置付け、造船会社のコスト合理化・品質向上に貢献する。塗装基準では、非溶接面に塗装した塗料が剥がれないように、塗装前に半径２ミリ以上丸めるか、３回のグラインダー掛けを義務付けている。

神鋼鋼板加工が“暑さ対策”（鉄鋼新聞、８／２０）

神鋼鋼板加工㈱（千葉県市川市、八十川雅明社長）は、現場オペレータの作業服に、ファンを装備した空調ジャケットを採用し、ヘルメットは熱中症対策用に空気の抜ける通孔が前後と左右についた仕様とした。他にも構内６カ所に、エアコンや冷蔵庫を完備した詰め所を設置し、不測の事態の際には休憩スペースとして活用。アルカリイオン飲料も用意してある。緊急対策用として、吸水ポリマーや頭部に貼るジェル状の冷却シートも準備した。

ニューエイジ、「環境経営」を推進（鉄鋼新聞、８／２０）

ニューエイジ㈱（茨城県結城郡、池田啓志社長）は、地球環境保全に配慮した経営マネジメント、いわゆる「環境経営」を全社的に推し進める。千葉工場（いすみ市大多喜町）で実施した環境経営の手法や成果を本社工場にも応用・水平展開し、無駄の排除による省エネや資源の有効活用を通じて歩留まり向上や構内物流の改善、コスト合理化につなげる。千葉第一、第二工場では、中小企業向け環境経営マネジメントシステム『エコステージ』の概念をいち早く導入。０７年秋には認証取得した。

建設機械出荷額、今年度は４１％増へ（鉄鋼新聞、８／３１）

日本建設機械工業会は、２０１０年度の建設機械出荷額が、前年比４１％増の１兆５０８８億円となり、３年ぶりに増加するとの見通しを発表した。うち国内向けは、３７７７億円。公共事業は低水準にとどまるものの一部住宅など民間需要が持ち直すことで油圧ショベルやトラクタなど５機種で前年を上回る。輸出は１兆１３１１億円。アジア向けや資源国向けの需要拡大で油圧ショベルが約２倍に増えるなど７機種で前年を上回る見通し。

村山鋼材、厚板加工１７万トン計画（産業新聞、９／２）

村山鋼材㈱（東京都大田区、村山和雄社長）は、来期（１０年１０月～１１年９月）における厚板部門の加工量について、前期比１３％増の１７万トンを計画している。外需にけん引されて回復が進む建機、産機を筆頭に、トラックやプラント向けなど、厚中板系の受注加工を積極的に取り込むとともに、店売り向け販売の強化にも取り組む。「再投資可能な収益を上げることが最大の経営目標」としており、加工量、経常利益ともに上積みを目指す。

菰下精密鎔断が防暑対策、『アイス食べ放題』（鉄鋼新聞、９／６）

㈱菰下精密鎔断（神奈川県厚木市、菰下淑子社長）は、板厚２００ミリアップの極厚板加工を手掛けるだけに、加工設備はすべてガス溶断機。レーザやプラズマのように無人・無監視運転もできず、オペレータは常に火炎のそばで作業する。こまめな水分補給や塩分補給はもちろんだが、同社ではアイス菓子を無料支給する。いつ食べても、何個食べてもＯＫだ。健康管理は自己責任。

玉造㈱、家族ぐるみで安全意識高揚（鉄鋼新聞、９／２１）

玉造㈱（札幌市豊平区、西村孝治社長）はこのほど、「安全衛生標語・ポスター表彰」と「家族ぐるみレクリエーション」を開催した。これは今年で３１回目となる恒例行事である。同社は、７月の全国安全週間に併せ、７月の１ヶ月間を安全衛生強化月間として独自にテーマや活動を決め、全社を挙げて安全衛生活動を実施している。その一環として、「安全衛生標語・ポスター」を社内で募集し、すぐれた作品を毎年秋に開かれる「家族ぐるみレクリエーション」で表彰する。今年の同月間のテーマは「正しい服装の励行」。サブテーマが「保護具の着用」と「夏場の健康管理」。今年の最優秀賞に選ばれた安全衛生標語は、『怪我をして辛い思いは皆一緒。しない、させない皆の目と声』。

ワコースチール、「厚板溶断・製罐」で総合力磨く（鉄鋼新聞、９／２９）

ワコースチール㈱（千葉県成田市、庄野洋社長）は、建機分野で培ったスキルとノウハウを建機以外の分野のも水平展開しながらレベルアップを図り、「総合力」に磨きをかける。リーマンショックに端を発する世界同時不況の影響で受注量は激減。厚板加工量は、それ以前の０８年度上期実績を（月間約３千㌧）を「１００」とすれば、最悪期の０９年１～３月期は、「５分の１以下」に落ち込み、最悪期を脱した後もしばらくは、「３０～４０」で推移。今年の春先になってようやく「６０～７０」に戻った。それが、足元はリーマンショック前の０８年度上期レベルまで回復し、下期には「１１０～１１５」に達する勢いにある。「半年前まで臨時休業していたのに、春先にやっと仕事が戻ってきたと思ったら、今は人手が足りなくて、仕事がやりきれず２～３時間の残業が常態化」しているようだ。背景には、主力の建機向け受注量が夏場から最盛期の９０％前後まで戻ったのに加え、建機の需要低迷期に、その落ち込みをカバーするために新規開拓した造船、橋梁・土木関連といった「非建機分野」が順調に実を結んできたことがあげられる。目下、建機以外の比率が３０％強を占めるようになった。「非建機分野」を採り入れるのは、ひとつの分野に偏りすぎないようリスクを分散する狙いもあるが、それ以上に、どんな分野にも対応できる総合力をつけることが根本的な理由である。同社は、今後とも建機向けが主軸を担うことに変わりない。ただ、ＱＣＤに対する感度を高くし、目指すは、「建機や建材など幅広い産業分野に通用する総合力を備えた厚板溶断加工・製罐業」への進化である。そのためにも、人材の確保と育成がカギを握る。

中部鋼鈑、地域住民招き工場見学会（鉄鋼新聞、９／２９）

中部鋼鈑㈱（名古屋市中川区、太田雅晴社長）は２５日、本社工場西側を中心とする中川区の正徳町、正保町、川間町の地域住民２２名を招いて工場見学会を開催した。同社は市街地に立地しており、環境対策などで地域社会の理解を深めてもらうため、隣接する地域住民を招いて定期的に工場見学会を実施している。見学会は、最初に会社紹介ビデオ「より良い明日をめざして」で鉄スクラップをリサイクルして厚板を生産する工程を説明の後、２２人が３グループに分かれ、製鋼・圧延・精整の各工場を見学した。